

役割や居場所を感じられる暮らし

1.暮らしたい都市と住宅とは

私が「暮らしたい都市と住宅」を考えるとき、「どの年齢になっても、自分の役割や居場所を感じられる暮らしができる」社会であり、それを叶えられる都市であることが必要だと考えている。ここでは私は特に高齢者に視点を向けていた。なぜそう感じたのか、私が出会った80代の女性の話をしたいと思う。若い頃、人の前に立って話すことや、みんなで物事を決めるときに意見を出し合うことが好きだったと話すこの女性は、今は年齢とともに身体が思うように動かず、地域での集まりにもお嫁さんに立場を譲ったため、自分は行かなくなってしまったそうだ。人の役に立つ感覚や自分の居場所が感じられないと話していた。人にとって、自分が役に立っていると言う感覚は、生きる上で大事である。しかし、身体が思うように動かなくなり、どちらかと言うと支えられることが多くなっていく高齢者では、この感覚を感じにくいのではないかと、この女性と話していく私は感じた。

だから私は、「自分の役割や居場所を感じられる暮らしができる」ことを重要に考えている。しかし、この言葉はとても抽象的であるためもう少し具体的にどんな暮らしと都市であるのか考えてみたいと思います。特に、ここでは役割や居場所を感じる主体を高齢者とし、役割は会社で働く時の役割というようなものではなく、日常でこなせるレベルの役割をさす。

2.大船渡市「居場所ハウス」

1を受けてここで例として考えたいのは、大船渡市「居場所ハウス」である。岩手県大船渡市末崎町にあり、NPO法人が運営主体のこの場所は、カフェと食堂を営業していて、朝市やちょっとしたイベントが開かれる場所である。公民館よりも気軽に、自由に出入りする場所として町の方に親しまれている。この場所として大事にされていることが、「誰もが役割を持てる施設では無い場所」であるということ。ここでいう役割とは、運営当番が忙しい時の食事を運ぶことや朝市などで販売する柿作り、くるみ剥き、また差し入れなどであり、誰にでもすぐできることである。

しかし、「まちの居場所」(編者:日本建築学会)で居場所ハウスを紹介する田中康裕氏は、「一方的にお世話されるだけでは居心地が悪く、自分にできる役割を担うことで堂々といられるようになる。それが消費や娯楽ではなく、誰かにとって意味のあるものであれば、自分

が役に立っていると言う尊厳につながる」と述べている。また、「歳を重ねると身体が思うように動かなくなったり、様々な悩みが出てきたりするのは当然のこと、そうであっても一人ひとりが自分にできる役割を担えることが大切にされ、肩身の狭い思いをすることなく堂々と居られる場所。これを実現しようとする試みが居場所ハウスである」とも述べている。このように高齢者が自分が役に立っていると感じることは非常に大事であり、高齢になるにつれて町にそのような場所は減るよう私は感じる。たいていの施設では、高齢者はサービスを受ける側、支えられる側として捉えられるからだ。故に、居場所ハウスのような場所は私が考える暮らしたい都市にあるべきだと感じる。

3. 陸前高田市広田町

次にまちの一つの場所ではなく、陸前高田市広田町の個々の住宅で取り組まれている、民泊の受け入れについて話したいと思う。陸前高田市広田町とは、人口 3200 人ほどの漁師町であり、東日本大震災の被災地でもある。震災を機に、少子高齢化・人口減少・担い手の不足などの問題が一気に加速した地域である。この地域が抱える問題は、これから日本の都市部でも顕在化してくる問題である。ここで行われている民泊事業とはどんなものなのか。一般的に「民泊」とは、住宅（戸建住宅やマンションなどの共同住宅等）の全部又は一部を活用して、旅行者等に宿泊サービスを提供することを指し、宿泊施設の不足を補うことや、空き家の活用と地方創生のきっかけとして着目されている。

この広田町での民泊では、宿泊者としては大半が修学旅行生であり、個人で訪れた大学生や学生以外も含まれる。一泊か二泊ほど、地域の風土や生活を体感したり、一緒に食卓を囲むという当たり前の体験をともにすることで、ホストの高齢者と関係性を築いていく。高齢者と宿泊する若者との心理的あり方がホームステイに近いことから、一般的な民泊とは少し違うため、この文章では広田町で行われている民泊を「ホームステイ民泊」として述べる。広田町でのホームステイ民泊の受け入れは、2016 年から修学旅行生を中心にスタートしていて、2019 年度では 64 世帯が民泊の受け入れを行った。この 64 世帯とは、広田町の全世帯数の約 10% である。息子世代が家を出て、大きな一軒家に夫婦二人暮らしという家庭も珍しくなく、使わない部屋も多いため、ホームステイ民泊を始めやすい環境ではあるかもしれない。

ここで着目したいのは、民泊の受け入れ家庭に与える影響である。ホームステイ民泊では、一つの家庭に対し、中高生は 3~5 人ほどが宿泊する。食事や家の準備、市街地までの送迎

など負担も大きい。送迎はだいたいどの家庭も片道20分以上運転する。しかしながら、広田町では2019年だけで見てみると、10家庭に1つの割合で、ホームステイ民泊受け入れ家庭があることになる。なぜ多くの家庭が、若者を受け入れているのか。その理由の一つに、受け入れ家庭の人たちにとって生きがいになること、生活にハリが生まれることが挙げられる。子供が美味しそうに作ったご飯を食べる姿や、学校での悩みを打ち明けてくれること、自分にとっては普段の何気ない生活に驚きの声を挙げてくれることなどがとても嬉しいそうだ。家に滞在する若者への行動が素直に相手の笑顔などにつながる。ここでも居場所ハウスと同じように、自分の日常的な行為によって、自分が役に立っているという尊厳につながるものを感じられるのである。

また、ホームステイ民泊では、個々の家庭内だけでなく、家庭同士の結びつきも強くした。ホームステイ民泊では、受け入れ家庭同士が会う機会というのが全部で3回ある。受け入れ家庭に対して行う説明会の時、修学旅行生の到着を出迎える時と見送る時である。その3回の機会以外に、広田町のホームステイ民泊の未来のために、受け入れ家庭の町の方の一人が、集まる機会を作ろうと「民泊女子会」を始めた。そこで、ホームステイ民泊についての情報共有や、思い出話しをする。その機会があることで、ホームステイ民泊を受け入れている家庭同士の連帯感や、年に何度も受け入れを無事に乗り切った達成感を得ると、受け入れ家庭の町の方の一人がおっしゃってくれた。もともと親戚同士の繋がりが濃く、血縁関係や、地縁が強い地域であるが、「ホームステイ民泊を受け入れている家庭」という共通点によって新たな縁が生まれていることにも価値を感じる。

長くなってしまったが、広田町でのホームステイ民泊は、受け入れ家庭の高齢者にとって、若者のために色々と準備をすること、そしてそれが子供たちの豊かな経験につながることが実感できることで、生活にハリを感じる。またその共通の経験があることで、新たな縁が生まれるのである。

4.提案

この二つの事例を通して、暮らしたい都市や住宅に必要とされる要素とは、人々が主体的に誰かにとって意味のあることにつながる役割を担える場所があるということである。そしてその「誰か」がすぐ近くにいたり、存在を認識できることが、役割を担う人にとって重要である。例えば、居場所ハウスでは、食事を運ぶことやくるみ剥きなどを通じて、運営当番のためや居場所ハウスのための役割を行えること。陸前高田市の広田町のホームステイ民泊では、民泊に向けての準備を通じて、家に滞在する若者のための役割を担えること。そして、

まちの中での一つの場所でも、住宅でも大事である。まちの中の場所としては、ではどういう場所が、こういう場所となりうるのか。

例えば、街中のカフェや食堂などは、目的がなくとも誰でも訪れ滞在が挙党される場所として人々が認知していることから、ポテンシャルを持っているのではないかと考える。公民館や町内会館などの使うハードルを下げることで活用しやすくなったり、既存の使われていない団地の集会所やコミュニティスペースなども活用できると考える。また、最近では図書館のあり方も変わってきており、本の貸し借りの利用だけでなく、滞在する場所として、利用者側の認識も変わってきていているため、ここでも「役割を担う場所」は生み出せるのではないかと考える。

これらのように、「役割を担える場所」は既存のまちの見方を変えていくだけで、生み出していける可能性があるように感じる。日本の何十年後であっても、「どんな年齢になっても、自分の役割や居場所を感じられる暮らしができる」都市は自分たちの手で作っていけるのではないか。

5.参考文献

まちの居場所 ささえる/まもる/そだてる/つなぐ

編者：日本建築学会 発行者：坪内文生 発行所：鹿島出版会

chapter10 執筆者：田中康裕